登場人物紹介

登場人物:両班頬骨 1人、袖口 1人、シシタクタクイ 2人、チャンジャマリ 2人、

楽士 15名（内外）

両班広大

過度に長いひげは虚しい権威を表現しており、尖った三角帽子は朝鮮時代の下級管理人のナジャンが使う典件で、両班が使う上品な亭子観とは距離が遠いと言える。 両班の道化師の踊りを見ると、老いて力がないが両班の威勢を見せようと努力し、袖の花嫁を見て途方に暮れる気弱で偽善的な両班の姿を踊りと動作で表現している。

袖カクシ

袖は小さな梅という意味で若い女性を指す

花嫁は両班の道化師に誘惑され、一緒に遊びながらお互いに愛を分かち合う。

くだらないことを言う人

「シシ」は「シュシュ-」という意味で、雑鬼を追い出す口音だ。 カチカチは仮面舞を踊る人を表現する用語なので、雑鬼を追い出す人物だと言える。

シシタクタクタクの仮面は刀の跡があり、五方色で塗り、観客が見れば驚くほどだと言った。 さらに、木刀を持って加勢する踊りを踊ると、さらに怖く感じるようになる。 考証によると、端午のある夏場にはしかにかからないように、シチカチカ仮面をかぶって遊んだという。

長者番付

張子馬里はその名前も独特だが、姿も非常に独特だ。 韓国の仮面劇では見られない唯一の仮面で、布袋のような麻の服を全身にかぶって出てくる。
目と口だけが見えて全体を覆っており、真ん中はお腹がふくらんでいて、穀物やタチウオ、わかめ、昆布などの海草をつける。
チャンジャマリは滑稽な身振りと、踊りが観衆に笑いを誘うという点が遊びの開始を滑稽劇に展開するという特徴を示している。

楽士

楽士は遊び場を楽しく誘導したり、合いの手を入れて脱走者の興を高め、観客の反応を起こしたりもする。

江陵端午祭　官奴仮面劇　公演内容

【第 1 場 チャンジャマリ開始広場】

仮面劇の始まりとともに、一番最初に布袋のような布仮面を全身にかぶった 2 人の長者マリが演戯開始をする。 騒々しくほこりを立てながら膨らんだお腹を突き出しながら、遊び場を広げるためにぐるぐる回りながら観衆を楽しませたり、先人を座らせたり、模擬的な行為の踊りも踊る。 チャンジャマリは喜劇的なスタートを誘導し、庭を整理学、滑稽な踊りを踊る。

【第 2 場 両班広大·小売カクシ サランマダン】

両班の道化師はとがったとんがり帽子をかぶり、長いひげを撫でながら上品で威厳のある姿で登場し、袖の花嫁に求愛する。 袖カクシは黄色いチョゴリのピンクスカートを着て、はにかむ姿で踊りながら、両班の道化師と互いに気が合い、肩を組んで場内を歩き回りながら愛を分かち合う。

【第 3 場 シチカチカの邪魔をする庭】

シシタクタクギは両側から豪放な剣舞を踊りながら飛び出してくる。 両班（ヤンバン）の頬骨と袖の花嫁の愛に嫉妬し、邪魔をすることを謀り、時には押したり引いたりして二人の仲を引き裂いたり、一方では両班の頬骨をからかったり、他方では袖の花嫁をからかったりしながら一緒に踊ったりすることを望んでいるが、頑なに拒否する。 これを見た両班の道化師は、大きく怒って焦るが、仕方なく悔しがっていたが、シチタクタクがよそ見をしている間に押しのけて抜け出て、袖の花嫁を奪ってくる。 シシタクタギは、袖の花嫁を奪われた後、責任をお互いに転嫁し、寂しい心を慰めながら庭の外を出て周囲を見回しながら、両班の道化師と袖の花嫁の間を見守る。

【第 4 場 小売ガクシ 自殺騒動の庭】

袖の花嫁を連れてきた両班（ヤンバン）道化師は、シチタクと袖の花嫁の間を誤解して袖の花嫁を叱責し、袖の花嫁は自分の潔白を訴えながら哀願するが、両班の花嫁の怒りは収まらないため、もうどうしようもないと言わんばかりに、自分が潔白であることを証明するため、両班（ヤンバン）道化師に首を巻いて死んだふりをして自殺を試みる。 しばらく倒れて死んだふりをする袖の花嫁を見た両班（ヤンバン）クァンデは、びっくりして神木（シンモク）の前に行ってお辞儀をしたり、愚痴をこぼしたりして、自分の心の狭さと過度な行動を反省する。

【第 5 場 和解の庭】

このように両班（ヤンバン）道化師の反省を悔いる姿を見た袖の花嫁は、両班（ヤンバン）道化師を許し、劇は滑稽に導かれ、両班（ヤンバン）道化師の誤解が解け、袖の花嫁の潔白が証明されるため、遊びは楽しい和解と共同体意識とともに観客と一緒に踊りながら、大同遊びで庭遊びを終える。